

先月の年長さんのお泊り保育の2日目。予定通り、朝のうちに草枕山荘を出て、保育園の園庭で年長さん達とお昼ごはんのカレー作りをしました。カレーが出来上がり、さあ食べようというときに、子どもたちがモースケの異変に気付きました。ついさっき、普通にえさを食べ、いつものように横になっていたのに、地面に横向けに倒れた状態で、手足をバタバタと動かし、痙攣を起こしたように暴れていたのです。いそいで駆けつけ、しばらく様子を見ていましたが、立ち上がることもできず、手足をずっとバタバタさせているので、電話して急いで動物病院へ運びました。病院に着くころには痙攣も収まり、ぐったりした状態でしたが、とりあえず、「点滴を打って様子を見ましょう」ということで、そのまま入院させました。通常の日曜日だったら、気付く人もおらず、月曜日に冷たくなって発見されていたかもしれません。

それから、約2週間の入院生活。園の子どもたちもビデオでメッセージを送ってくれたり、折り鶴を折ってくれたり、職員、旧職員、卒園児も病院までお見舞いに行ってくれたりしました。ビデオから聞こえる子どもたちの声に反応を示し、一時は、自分でエサが食べられるほどに回復しかけていたのですが、24日（土）のお昼頃、病院から電話があり、「呼吸が乱れてきたので、病院に来れますか？」との知らせ。夕方早めに行くことにしたのですが、すぐにまた電話があり、「たった今、呼吸が止まりました。」と連絡が入りました。急なことでしたが、苦しまずに神さまのところへ行くことが出来たようです。

正確な歳がわからなくなるぐらいに長生きしていて、ちゃんと調べてみたところ16歳9か月でした。人間で言えば90歳ぐらいでしょうか。モースケは、もう今は成人している卒園児の家でたくさん生まれた仔犬のなかの1匹でした。園児のお父さんから「どの子にしますか？」とダンボール箱のなかの仔犬たちを見せてもらったときに、箱の中に入れていた私の手を最初に舐めたのがモースケでした。他の仔犬たちとは毛並みも違い、白と黒のブチで、まるで乳牛のホルスタインのような柄で、「この子は牛みたいだから、モースケっていうんですよ。」とのこと。「じゃあ、このモースケを園で育てます！」とその場で決め、園で育てることになりました。さっそく、その年の年長さんたちと、モースケの小屋を作り、モースケと同じ白黒のブチで塗って仕上げたのおぼえています。

新入園の子どもが、まだ不安で泣いてばかりいるときでも、抱っこしてモースケのところに連れて行くと、ほとんどの子はモースケを見て泣き止んでいました。友達とケンカして泣いて、モースケのところに行ってモースケを撫でているうちに気持ちを立て直して、また元気になって部屋に帰ってくる子もいましたし、朝、まだ登園している子が少ない時に一緒に散歩に行くことを毎日楽しみにしていた子たちもいました。

犬ですから、しゃべることはありませんでしたが、いつも温かなまなざしで子どもたちを見守ってくれていた気がします。まだ若い時にはエサを食べている最中にちょっかいを出して噛まれてしまった子もいましたが、基本的には子どもたちがイタズラしてしっぽをひっぱったり、背中をたたいたりしても怒って吠えたりすることはなく、いつも穏やかでした。子どもたちや保護者の方々に吠えるようなこともありませんでしたが、営業などでスーツを着た人やちょっと怪しい感じの人にはちゃんと吠えて教えてくれ、番犬としても立派に役割を果たしてくれていました。仔犬のときから、大きな病気やケガをすることもなく、投薬や注射以外では、病院にかかったことは一度もありませんでした。

子どもたちだけでなく、私たち大人もどれだけモースケに癒されたことか。かけがえのない、からたちの職員でした。命の温かさ、愛らしさ、そして悲しみについて、身をもって教えてくれたように思います。

9月24日（土）の午後でしたが、モースケの訃報を聞き、休みの職員、旧職員も駆けつけてくれ、また来れない旧職員たちは、お花を贈ってくれて、その日の夕方、登園していた子どもたちと一緒に、お別れのときを持つことが出来ました。

「モースケ、安らかに。今まで本当にありがとう。」